



中国の温泉地の変容について

于 航¹⁾

(令和 3 年 4 月 12 日受付, 令和 3 年 5 月 31 日受理)

Transformation of Hot spring Resorts in China

Yu HANG¹⁾

Abstract

Hot springs in China were once used for the staff's welfare in state-owned enterprises, but they are used as tourism resources for tourists by reform of public-funded medical system today. Until early 21st century that planned economy was taken place of market economy, accommodation was built in hot spring town and local changes of the development was remarkable by the time. This article describes spa's relaxation function of laborers who played a central role in the use of hot spring and then discusses the tourism function of Anshan Tanggangzi hot spring and the tourism development of Dalian Anbo hot spring, which large-scale tourism development has been advanced by eternal capital as case studies.

Key words : Transformation of hot spring resorts, Medical treatment of hot springs, Health institution of hot springs, Sightseeing of the hot springs

要 旨

中国の温泉利用は、国営企業の職員を休養・療養させるための福祉的な利用目的から、公費医療制度の改革により、一般客による観光の利用目的に変わったことが特徴的である。従って、21世紀初頭まで、計画経済から市場経済への激しく変動する時代において、温泉地で建設された温泉宿泊施設や、その開発に伴う地域の変容も著しい。本稿はかつて温泉利用の中心的な役割を担っている労働者の温泉療養機能から出発し、「療養」を核として、観光機能を加える鞍山市湯崗子温泉と、外部資本の参入による大規模な観光開発が進む大連安波温泉の変容を例として、中国の温泉地の変容について考察した。

キーワード：温泉地の変容，温泉療養，温泉保養，温泉観光

¹⁾城西国際大学観光学部 〒299-2862 千葉県鴨川市大海 1717. ¹⁾Faculty of Tourism, Josai International University, 1717 Futomi, Kamogawa City, Chiba 299-2862, Japan. E-mail yuhang@jiu.ac.jp

1. はじめに

1.1 中国の温泉地の変容における社会背景

中国改革開放政策の導入直後から外資参入を含めた大規模な開発が始まった中国南部と開発計画が遅れた東北地区では、温泉地の変化の様相が異なっている。すなわち、南部では観光型へと急速に変化したのに対して、東北地方では療養型から観光型に徐々に変化し、あるいは療養型から中間型をへて観光型に変化してきていると言えよう。

温泉地開発と地域展開の前提として、中国の経済力の高まりがある。1980年代には「沿海経済特区戦略」策のもとに、広東省がその中心地をなし、香港資本をはじめ外国資本が参入して、大型露天風呂、高級施設が整っている温泉テーマパークや温泉リゾートが次々と開発されてきた。1990年代には、「上海浦東新区開発戦略」や「中国西部大開発」策の影響で、長江三角州や西部地区が大きく変貌した。一方、建国初期に中国の工業や国民経済に大きく貢献した東北地方は、資源の枯渇や国有会社の体制転換などによって、経済力の停滞が指摘できる。21世紀初頭、「東北工業基地の再振興」政策が正式に決められ、東北地方への財政投入が大幅に増加した。観光地の開発が再振興政策の重要な分野として期待されている。このように、東北地方の観光地開発政策が進められる中で、福祉施設としての温泉療養院が多かった温泉地は、公費医療制度の改革もあって、療養機能を重視したものから保養や観光の機能を重視した方向へと変化し、温泉療養院が次第に観光化されるに至った社会背景がある（于，2008）。

1.2 中国の温泉地変容のパターン

中華人民共和国成立後の中国温泉利用の歴史を振り返ると、中心的な役割は労働者の温泉療養であった。本稿は中国全土の療養院の約半数以上が集中している遼寧省の温泉地発達過程を考察し、中国の温泉地の変容を管見する。

中国東北地方にある遼寧省は重工業基地として機能してきたので、工業従業員の温泉療養が20世紀初頭の早くから盛んであった。これらの療養温泉地は中国の経済力向上によって観光化され、温泉療養院自体及びその所在する地域が急激に変容している。公費医療制度の見直しにより、療養院の患者数が急激に減少し、経営不振に直面しており、病棟の一部を開放して積極的に観光客の受け入れを図り、療養機能を維持しつつ観光機能と共存する変容パターンである。

一方、既存温泉地域には、外資誘致のもとに観光化への転換が著しい。観光、休暇、娯楽を一体化した大型で多機能の温泉城が建設されることになった。温泉施設が拡張し、地域への浸透により、温泉地の地域構造や地域発達に大きく変容させている。

本稿では、これまでの研究成果に基づき、鞍山市湯崗子温泉と大連市安波温泉を例として、21世紀初頭までの激動する変容過程について分析を行う。

2. 鞍山市湯崗子温泉の変容

2.1 鞍山市湯崗子温泉の発達変遷

遼寧省鞍山市から12キロ離れた南郊にある湯崗子温泉には豊富なミネラル物質が含まれ、泉源が72度である貴重な泉質である。何千年も前の火山灰をそのままを利用している天然熱鉱泉泥と治療技術が高く評価されているほか、長い歴史を持ち、独特な温泉文化も注目されている。その発達過程については以下のように整理できる。

(1) 第2次世界大戦前

湯崗子温泉は中国の有名な温泉地の1つとして数えられるが、長い歴史の中で、この温泉が発見された時代を示す具体的な歴史資料はない。「中国名勝詞典」に「金天会八年(1130年)、太宗曾赴此温湯」の記述がある。遼・金時代、現在の湯崗子温泉付近に「湯池県」が設立され、この名前の由来は「温泉」から命名された。清の時代には、今の湯崗子鉄道の西側と娘娘山の東側の間に、地元と周辺の住民約一万人が、自発的に一年をかけて、乾隆皇帝が先祖の発祥地である瀋陽の墓参りに行く途中に湯崗子温泉を訪ねるための「御道」を作ったという伝説も残されている。

植民地時代は湯崗子温泉発達史の中で、最も重要な部分である。日本人やロシア人により、十年間余建設され、経営されてきた湯崗子温泉は、当時満州とモンゴル境内にいるロシア人、日本人及び満州の貴族・官僚・商人たちの間で有名である。北満州各地をはじめ、遠く天津・青島・上海からの外国人入浴者も殺到し、満州植民地時代の避暑・療養の楽園になっていた。湯崗子温泉は当時の満州にある熊岳温泉や安東五龍背温泉とともに「満州三大温泉」と数えられた。

1905(明治38)年8月10日、日本陸軍大山大将の司令部は大連から湯崗子温泉に移設され、「満州軍総司令部」が設立された。当時、日本軍は湯崗子温泉を「陸軍転地療養所」として兼用した。

1921年、東北軍閥張作霖は中国趣味をとり入れた中国古代式的な3階建ての龍泉別荘を建設した。その後、湯崗子温泉株式会社の経営で、高級旅館として運営されるようになった。

20世紀初頭、日本の「満州・湯崗子温泉株式会社」は当時の専務である児玉翠靖の名前を使って、玉泉館(4病室)と対翠閣(5病室)を建てた。最初の建築費用は18万元であり、その他、火力発電、内部設備などの費用合わせて、およそ30万元を費やした。「対翠閣」は破風宮殿造りの建物で、内部は和洋折衷風、客室31部屋と大広間1つがあった。大理石で作られた豪華な浴室5つのほか、貝殻大浴場が2箇所あった。また、清朝最後の皇帝愛新覚羅溥儀を監視するため、「対翠閣」本来の建築風格を保った上、「龍宮温泉」が増加され、その中で、末代皇帝溥儀や皇后婉容と大臣たちの入浴専用のため、「龍池」・「鳳池」と「五大臣池」まで設置した。1931年11月13日と1932年3月6日、清の末代皇帝愛新覚羅溥儀、皇后婉容及び満清の大臣たちは湯崗子温泉の「対翠閣」を訪れ、1週間ほど滞在したことが歴史上に記録された。

「満鉄株式会社」は当時、湯崗子温泉と附属地区を「満鉄中央公園」として建設することが計画され、公園事務所を設立した。1919年7月温泉を中心とする運動場・野球場付きの公園がデザインされた。当時の公園敷地面積は536,764平方メートルを有し、南満州鉄道株式会社が出版していた「満州温泉案内」の中で、湯崗子温泉について「池は、釣魚、ボート遊びに適し、テニスコート・小運動場などの戸外運動設備はもとより、ダンスホール・ビリヤード場そのほか、室内遊戯も完備している」のように書かれていた。

(2) 第2次世界大戦後

新中国成立後の湯崗子温泉は、歴史の長い大型国有療養院として機能し、21世紀初頭まで東北地方ならではの温泉地発達と地域変貌を成し遂げた。①温泉療養院建設期(1949~1958年:社会主義建設期)、②温泉療養院発展停滞期(1959年~1977年:三年自然災害と文化大革命期)、③温泉療養院観光地萌芽期と発展期(1978年~2003年:鄧小平と江沢民指導の下で、改革開放初期と深化期)、④温泉療養院の再編成期(予想)(2003年~胡錦濤の「東北工業基地を振興期」)のように区分することが考えられる(王・山村, 2001)。

1) 温泉療養院建設期(1949年~1958年)

この時期には、8年間の日中戦争、4年間の国内戦争が終わって、中華人民共和国の成立を迎えることができた。建国初期、「一窮二白」、「百業待興」の状況下で、東北地方遼寧省の鞍山市は中国鉄鋼業・石炭業などの重工業地域として、大勢の労働者が集中している。「工人階級領導一切」

という社会主義制度の指導下で、産業工人階級を高い社会地位に位置づけ、そうして、中国は旧ソ連や東ヨーロッパの温泉地をモデルにして、1950年代末まで中国全土に約100カ所の温泉療養院が誕生した。その利用状況は、新中国建設期において、過去戦争中で負傷した戦士や英雄、働く現場の工人や労働模範者など、政府や工場側からのご褒美として温泉利用の特権を提供した。戦傷者の治療と回復、工人たちの疲労解消に温泉療養院が大きい役割を担っていた。

このような歴史背景下で、1949年人民志願軍が湯崗子温泉施設を接收し、1950年5月東北人民政府健康委員会湯崗子温泉療養院（現在の玉泉館、龍宮賓館、医院オフィス・ビル、治療室など）と命名した。1954年東北総工会工人療養院（現在病院の南七、八、九、十療養棟）が成立され、1956年中国煤鋳工人湯崗子療養院（現在北側家族寮）が増設された。そうして、1958年に以上三つの療養院を合併し、現在の湯崗子温泉療養院の前身になった。当時、湯崗子療養院の規模は三つの病棟、合計300のベッド数を有していた（図1）。普通患者の療養には約3カ月を要するのが一般的であり、一般患者への治療のほか、1950年に勃発した朝鮮戦争で負傷していた傷病兵を集団で収容・治療した。

2) 温泉療養院発展停滞期（1960～1977年）

1959年から1961年間に、「三年自然災害」または「三年経済困難」時期と呼ばれ、災害に襲われ、農作物が不作、食糧不足が原因で全国の餓死者の数は1500万人を超える極めて厳しい時代であった。さらに、60年代以後、中国とソ連との関係の悪化や1966年から1977まで十数年間を渡って続いた文化大革命政治闘争により、この時期全国の温泉療養院は停滞していた。1976年に唐山大震災の傷者450名を受け入れたことのほかに、「湯崗子温泉院誌」はこの時期についての記録がほとんどない。

3) 湯崗子温泉療養院観光地萌芽期と発展期（1978～2003年）

1978年以後、鄧小平指導のもとに展開されてきた改革開放政策によって、中国は新しい歴史時期に入った。特に江沢民時代社会市場経済理論の指導下、経済力が著しく発展していた。しかし、80年代初頭、遼寧省の国内生産総値は全国の3位であり、省ごとの国内総生産値では遼寧省は広東省の2倍に相当していたが、21世紀初頭になると、広東省は遼寧省の2倍を上回った。特に、大型国営企業は90年代後半からさらに苦しい困境に陥ってしまった。改革開放以来20年間、深圳を代表する珠江三角洲と上海を代表する長江三角洲の高成長率に比べて、公有制や産業構造体制は重工業基地である東北三省の発展を制約する重要な一因と言われている。

したがって、湯崗子温泉療養院は国営企業として、外国や香港・マカオの資本を受け入れたことによる急激な観光地化変化を遂げた中国南部の温泉地とは、かなりの発達格差が認められる。国営企業と公的な事業機関における医療制度の改革、すなわち、国営企業が職員の医療費用を全部負担する公費医療制度から、職員個人が医療費の一部或いは全部負担する医療制度を導入するようになった。温泉療養費が高騰する原因で温泉療養者の数が減少したのである。そして、温泉地の性格は大きく変化することになった。この時期の湯崗子温泉周辺には共産党鞍山市委員会組織部の老幹部療養院、鞍山市役所農業委員会所属の聚龍賓館、鞍山市交通警察大隊湯崗子温泉療養院と軍隊温泉療養院など、国家公務員の福祉のため、行政各機関が医療機関とは異なる保養院を建設してきた。これら保養院の成立により、以前依存していた公務員療養客を一部分が流されるようになった。

4) 温泉病院の再編期（2003年以後）

1978年改革開放以来、中国の主な経済成長の著しい地域は沿海部、特に珠江三角洲と長江三角洲が中心となったが、1998年「北西部を開発する」政策が確立され、また、2003年に中国共産党「第十六三中全会」で胡錦濤が国家主席に就任し、北東部（黒龍江省・吉林省・遼寧省の東北三省）と北西部（寧夏回族自治区・新疆ウイグル自治区・青海省・陝西省・甘粛省の西北五省）は中国経済

2.2 鞍山市湯崗子温泉利用客の変化及び温泉地の機能変化

湯崗子温泉は国営大型総合病院として、長い歴史の間、普通の労働者を中心に疲労回復のため、保養の場を提供していた(于, 2013)。また、温泉水や熱鉱泥を利用し、物理的な治療方法と中治療法を加えたうえ、リウマチなどの病気を治療するという温泉療養地としての役割も強調された。さらに、競争が激しい現代社会の中、ストレス解消・健康増進・生活習慣病予防・観光などの利用目的も増えてきた。病気を持つ人から、健康な人まで、幅広く利用されている。湯崗子温泉は「休養」・「保養」・「療養」の場として重大な意義を有している。鞍山(海城・岫岩・台安を含む)などの地区も医療保険の対象地区となるので、療養客の8割を占めている。知名度の高い湯崗子温泉療養院の素晴らしい医療技術は遼寧省内のみならず、国内外に広く知られている。特に療養・保養の目的で訪れている利用者の中、東北三省から来訪している利用者が多い。遼寧省の瀋陽、大連の他、龍江省のハルビン、吉林省の長春など中国東北部の大都市、いわゆる建国初期国営企業が集中していた地域から来た定期保養客は少なくはない。

湯崗子温泉療養院成立時、3つの病棟、ベッド数はおよそ300、21世紀はじめは病棟数10棟、ベッド数は1300まで、大型総合慢性病治療医院として発展してきた。「中国四大理療康復センター」の1つと数えられ、遼寧省康復センターの所在地であり、中国衛生部理療医師育成基地でもある。治療方法は水療法・泥療法・蠟療法・電療法など60種類の物理的療法と中国伝統的な中治療法を中心に行われている。療養院は康復科・骨傷科・リウマチ科・老年病科・軟組織損傷科・糖尿病科・皮膚科7つの臨床部門と物理医学・運動医学・鍼灸医学・マッサージ医学の4つの治療科室から構成されている。専門医師・看護婦から、運動・栄養専門家まで1,000人以上の職員が常駐し、療養・保養客への指導のみならず、一般の観光客へのアドバイスも行われ、「健康観光」を目的で訪れた観光客にとっても、大変満足していて、湯崗子温泉の魅力強く感じているようである。

現在、新型コロナウイルス感染拡大の不安の中、温泉地及び滞在施設利用への期待が高まっている。かつて、湯崗子温泉療養院は1951年に抗米援朝志願軍負傷者を収容・治療した。また、1976年の唐山大震災の傷者450名を受け入れたことがあった。2003年には北京小湯山温泉療養院がSARSの患者を収容・治療した。国営療養院は現代社会においても、緊急事態の際に、特殊な社会役割を担い、社会的な「公益性」が機能することが評価されている。

高齢・少子化社会が進む今日、温泉病院側は医療施設の整備や医療水準を向上させるほかに、患者の病院での入院生活を充実させるための精神面にも配慮する必要がある。湯崗子温泉の場合は、院内に休憩の場である温泉広場で、毎日朝と夕方専門医師指導の下で、近接地域住民と滞在客が一緒に健康体操や太極拳などをやりながら、コミュニケーションをとることにより、心身の癒しに大きな効果をあげている。こうした形態で、滞在客と地域住民が触れ合う場所となり、地域社会の活性化に有意義であることは疑いを入れない(写真1)。

温泉歓楽や温泉観光活動が始まって以来、療養院は温泉観光や歓楽を重視するが、けっして温泉の療養機能を軽視していない。療養院での療養機能としての施設空間を守っていくことが最も大切である。療養客が静かな空間を求めている一方、観光客がカラオケ、バー、ダンスホール、プールなどの歓楽的な機能を持っている空間を追求している。したがって、療養院は今後の開発に、療養客用施設と観光客用の空間をバランスよく配置することを考えなければならない。日本の場合は、温泉地はもともと療養の場として利用してきたが、経済急速発展とともに、温泉地にも観光化の波が寄せ寄せた(山村, 1998)。21世紀初頭の中国と80年代団体旅行が盛んであった高度経済成長期の日本と酷似していて、療養温泉地が歓楽型温泉に変わりつつある。しかし、近年の日本において、温泉本来のもっていた療養、保養機能を再評価する傾向が強くなってきている。湯崗子温泉療養院は、温泉の「核」である療養機能を守りながら、観光機能を加えて、中国の温泉地の変容の一



写真 1 湯崗子温泉広場で賑わう地域住民と滞在客の様子
(注) 筆者撮影 (2008 年)

つの形態を提示している。

3. 大連市安波温泉の変容

3.1 大連市安波温泉の発達変遷

環渤海経済観光圏の中心部に位置する大連市は、「北方小香港」と言われるように自然・環境・文化が豊かであり、中国の行きたい観光都市としてよく選ばれている。しかし、海浜都市である大連市は、夏季の「3S」(Sun Sand Sea) を楽しむ目的で訪れる観光客が多く、冬季は観光のオフシーズンのため、比較的観光客が少ない。通年型観光の問題を解消するため、潜在観光資源としての温泉資源が注目されるようになった。温泉地は年間を通した新しい観光需要の大きな受け皿となり、ゴルフ場・スキー場・土産店・ショッピングセンターなどの関連産業を成長させることが期待される。大連政府の政策の下で、大連市内各地で大深度の温泉が掘削され、また、農村地域の既存温泉地にホテル・温泉浴場などの温泉施設が続々と出現した(于, 2008)。

大連市は観光リゾート産業の振興策の中で、「大連安波温泉リゾート区」を設定した。大連市安波温泉リゾート区は、遼寧省南部観光中心地である大連市の至近に位置するとともに、瀋陽経済圏と丹東経済圏に囲まれおり、多数の利用客を確保できる観光産業の発展にとって有利な地理的条件を持っている。安波温泉地は温泉を核にして、周囲の自然・人文景観と結合し、大連国際海浜観光大都市の内部へ延長線上の一環として、保養観光の機能を兼備する総合観光地として評価される。

21世紀初頭の安波温泉リゾート区は、2つのコミュニティ、8つの村、1つの鎮と231屯で構成されており、安波温泉地は行政上大連市(地区級)と普蘭店(県級)に属し、安波鎮が直轄している。2000年の鎮政府の観光収入は1.2億元であり、2005年には4.6億元に増え、わずか5年間で観光による収益が約4倍にのぼった。宿泊客数も2003年の1万7,000人から2006年には3万7,000人へと急増している。この時期は安波温泉地の地域変容に大きな影響を与えた激動期と言えよう。

3.2 大連市安波温泉の開業施設の資本変化

大連市安波温泉の開業施設の資本変化の調査データから、安波温泉地の変容を分析してみる。まず、大連安波温泉地域における温泉施設の開業件数の推移をみると(図2)、1980年代までは開業しても、せいぜい年間1~2件程度であったが、1990年代の開業件数は大幅に増加していることがわかる。特に1990年代後半、1996年の11件をはじめ、新規開業のピーク期を迎えた。収容人数

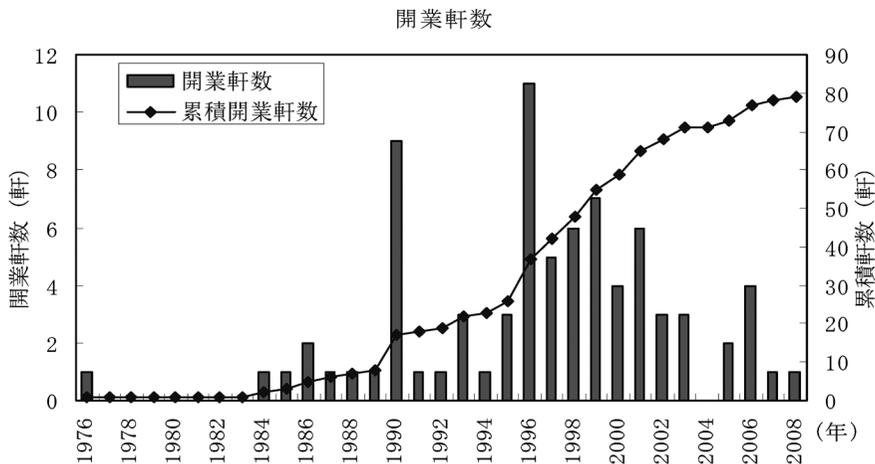


図 2 安波温泉リゾート区における宿泊施設の開業軒数の推移 (1976年～2008年)
(注) 現地調査とヒアリングにより筆者作成

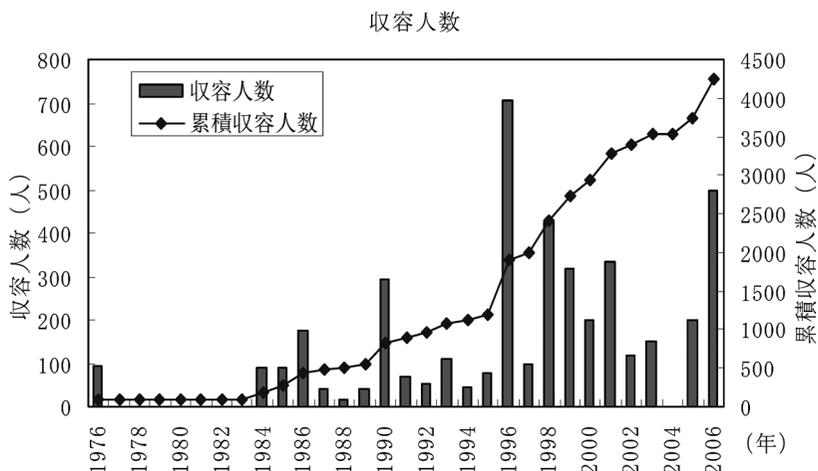


図 3 安波温泉リゾート区における宿泊施設の収容人数の推移 (1976年～2008年)
(注) 現地調査とヒアリングにより筆者作成

の推移には開業件数の推移とはやや異なっており (図3), 年次を経るにつれて, 開業件数の割には大きな収容人数となっている。この傾向は2000年代に入って, 特に顕著であり, 施設の大規模化を示すものである。投資金額は, 開業件数および収容人数とは異なった推移を示しており, 2000年以降の投資金額の多さが際だっている (図4)。中国における高度成長に伴う物価水準の上昇を考慮しても, 近年の施設には極めて多額の投資がなされていることを示すものである。

続いて, 経営主体及び投資金額と収容人数との関連性について分析する。まず, 経営主体による違いが明らかであり, 個人経営タイプの施設は, 投資金額100万元未満, 収容人数50人以下に集中しており, 他経営主体と比べ, 小規模, 小投資の施設が数多く存在していることが一目瞭然である。これに対して, 会社経営タイプの施設は, 投資金額1,000万元以上, 収容人数100人以上の大規模・高投資の大型施設が多い。国家経営タイプは, 投資金額100～1,000万元, 収容人数50～100

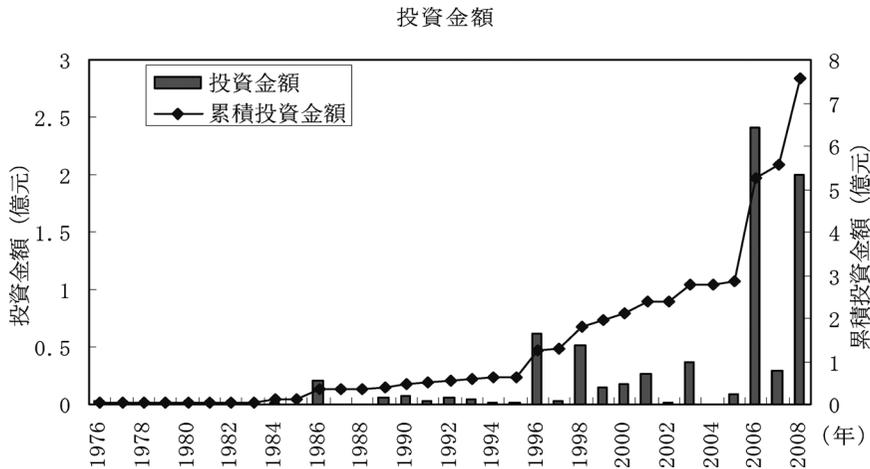


図 4 安波温泉リゾート区における宿泊施設の投資金額の推移 (1976年～2008年)
(注) 現地調査とヒアリングにより筆者作成

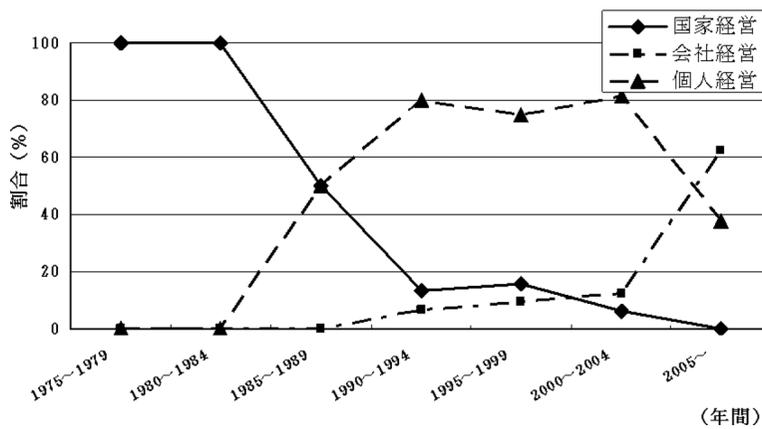


図 5 安波温泉リゾート区における宿泊施設经营主体別 5 年間開業軒数の割合
(注) 現地調査及び内部資料により筆者作成

人が多く、投資金額・収容人数という点で個人経営タイプと会社経営タイプの中間に位置している。地元資本による小規模旅館経営が主流であった。その後、大都市の企業による多額の投資がみられると同時に、多数の個人も経営に参加して、宿泊施設が超小規模と大規模に二極分化した。

2000年代の施設の多くは、会社経営によるものであり、宿泊施設の大規模化のみならず、付帯設備と一体となったものである。会社経営の1施設あたりの投資額は9000万元と大きくなっている。総じて、安波温泉の開業施設の資本変化は、Ⅰ初期国家経営の施設、Ⅱ個人経営による小規模施設、Ⅲ会社経営による大規模施設、三つの段階を経て、変化していることが分かる (図5)。

3.3 大連市安波温泉の地域変容

2000年に採用された大連市政府主導の大連安波温泉リゾート開発計画の中、初期(2005年まで)は道路・送水管・温泉広場・河道緑化などの基盤整備、中期(2010年まで)は娯楽設備周辺観光

スポット・住民生活区の整備，長期（2020年から）は普蘭店北部の開発を含めた広域開発と設定している。

1980年代初頭頃の安波温泉は，地域内を東西に走る幹線道路沿いに集落が形成され（写真2，写真3），北から南に流れる安波河との交点付近が中心地であった。平地は畑地として利用され，主に玉蜀黍が栽培されている。この周辺地域は玉蜀黍畑の中に集落が点在する純農村地域として性格づけられていた。温泉施設としては，安波供売合作社療養院（1976年開業）と大連安波温泉療養院（1980年開業）の2軒のみで，前者は中心集落に，後者は西部の高台に立地している。

1980年代後半から国家経営の温泉施設が建設されるが，これらは療養に必要な緑地に恵まれた自然環境を確保するために，中心集落を形成する中心道路から南方の立地を選んだ。一方，1990年代から活発になる個人経営の中小規模旅館を中心とした新築の施設は，安波河より西部の中心道路沿いに新設された。また，中心道路と安波河の交差点から北方に延びる地区は，安波温泉地農村集落の行政中心地であり，小さい売店や診療所などが集中していたが，同時期に建物の建て替えや増築による温泉旅館の増加により，南北に延びる温泉小旅館街地域となった。すなわち，個人経営の小規模宿泊施設は，北方と西方に延びる「逆L」字型のように分布するようになった。

行政中心地での温泉開発が進むにしたがって，中心地の開発可能な土地は次第に狭くなり，鎮政府は，1990年代半ばから安波河東側の中心道路の拡幅に着手，新しい役場をここに移転させた。この拡幅事業では温泉送水線，歩道などの基盤整備も行われた。これらの基盤整備によって，以前畑地として利用されていた道路の北側には，温泉付き住宅マンションや商店が建設され，安波温泉地の新生活区となった。また，銀行・交番・消防署・電信局・税務局・供電局などは中心道路南方の安波河西側に移転させた。このようにして1990年代には，安波温泉地市街地は，中心道路と安波河の交点を中心として，「十」字型に拡大してきた。

1990年代後半から，会社経営による大資本が安波温泉地に進出した。1996年に大連安波温泉度假村は，安波温泉地の中心地区と離れた南西方の高台で開業した。独立性の高い飲楽型高級温泉施設と位置づけられた。開発が進む中で交通の整備が求められ，南部には中心道路と平行する新たな道路が造られた。道路の開通により，1998年には，安波温泉地の南入口，東入口には，大規模投資の温泉施設が進出した。更に，2003年に開業した大連安波スキー場と2006年に開業したゴルフ場・乗馬場・釣り場つきの総合型温泉施設が広大な土地を持つ安波温泉南西部に進出した。

このように，大規模開発は広大な土地を必要とすることから，交通の利便性が高い市街地から離



写真2 大連市安波温泉の東西主幹道の西入口付近の様子 (1999年)

(注) 中西僚太郎撮影



写真3 大連市安波温泉の東西主幹道の西入口付近の様子 (2005年)

(注) 筆者撮影

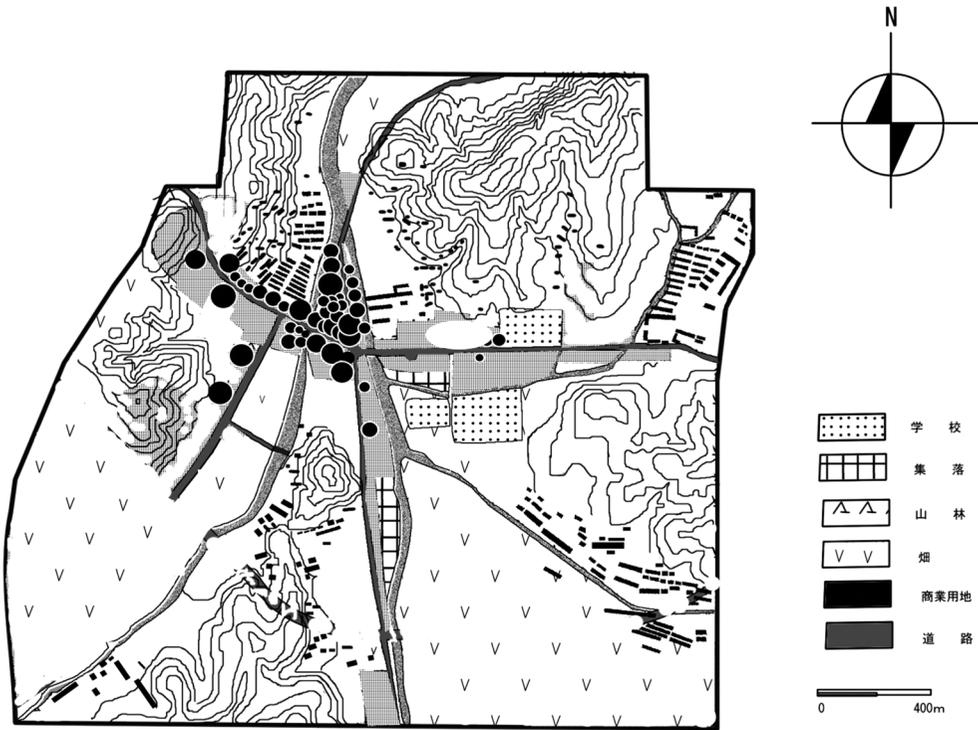


図 6 安波温泉地域における宿泊施設の分布図（1990年代半ば）
 (注) 現地調査により筆者作成

れた地区で進められた。その結果、温泉施設の建設は密集型から分散型へと変化し、市街地の分布模様は大きくその姿を変えている（図4、図5）。

3.4 大連市安波温泉利用客の変化

安波温泉地の地域構造は道路の整備状況と密接な関係を持っている。開発事業によって整然とした道路網が整備され、主要道路沿いには宿泊施設や食堂など観光関連施設のほか地域住民ための商業施設が建設されてきた。これらの観光関連施設や商業施設の分布状況は街路によって異なっており、街路ごとに異なった性格を持っている。2006年頃、域内の道路沿いの304軒の施設を使用目的によって、分析した結果、中心道路の安波河以東街区は飲食街と温泉兼業旅館街、中心道路の安波河以西の街区は住民利用中心の商店街、南北道路北側街区は専門温泉旅館街、南北道路南側街区は行政街、西南道路街区は大型総合温泉施設街と分類することができる。

施設の建設年代により、初期段階では、大連安波温泉域内に1976年に開業した安波供売合作社療養院と1980年に開業した大連安波温泉理療院は、主に遼寧省内の公費医療の国営企業の職員が休養・療養の目的で利用されている。80年代に入り、中心街路沿いに分布している地元経営の小規模旅館は、主に国営企業以外の一般の客に開放し、個人でも負担できる範囲の安い料金プランを提供した。長期療養・保養目的で滞在する利用者が主流である。2000年以降、多額の投資が可能な外来資本による総合的大規模開発が進み、温泉利用のみならず、飲食・運動・娯楽など、多様な目的で、幅の広い年齢層の利用者が増加している。

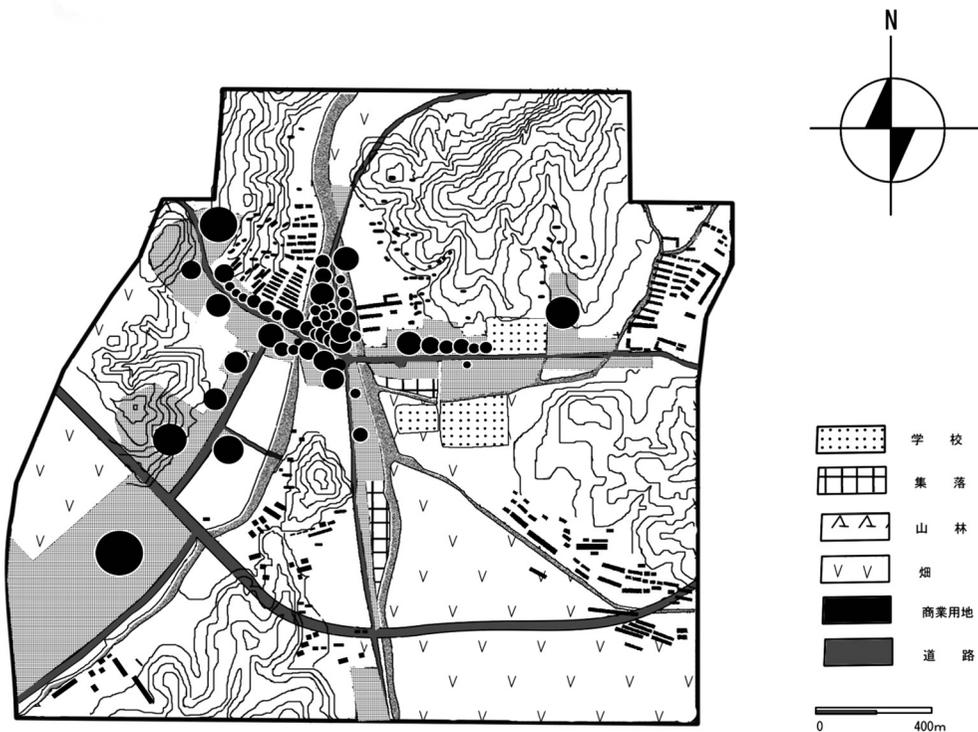


図 7 安波温泉地域における宿泊施設の分布図 (2006 年)
 (注) 現地調査により筆者作成

4. 考 察

21 世紀初頭までの中国では、計画経済から市場経済への激しく変動する時代において、温泉地で建設された温泉宿泊施設や、その開発に伴う地域の変容も著しい。かつて温泉利用の中心的な役割を担った労働者の温泉療養機能から出発し、「療養」を核として、観光機能を加える鞍山市湯崗子温泉と、外部資本の参入による大規模な観光開発が進む大連安波温泉の変容を例として、異なるタイプの中国の温泉地の変容について考察した。

近年、中国では温泉療養より、温泉観光が一気に注目されるようになった。その発展の要因として、人々が第 1 に温泉観光は健康に良いという認識を高めてきたこと、第 2 にレジャーの需要を満足させること、第 3 に費用が観光客の客層に応じて多様であることなどが指摘できる。しかし、盲目的な温泉観光開発により、地域的特色の欠如、利用料金の高騰、娯楽要素の強調など、諸問題が浮上している。特に、中国では少子高齢者社会が最も進んでいる東北地方においては、かつて国有企業で勤務し退職した高齢者にとって、馴染みのある温泉療養への期待が最も高いのである。中国の温泉地利用は一般的に療養型から観光型へと変わる傾向であるが、温泉利用による心身とも健康の状態を保つ「ウェルネス」の部分が再認識され、「温泉康養」の概念が広がりつつある。今後、温泉観光機能とのバランス調整をしつつ、日常生活圏から離れた「非日常」を味わえる場である温泉地が、長期滞在のできる「日常生活の場」へ発展し、サステナブル性を持つ温泉地づくりを期待し、今後の中国の温泉地の変容を注視したい。

謝 辞

本稿の骨子は、第73回日本温泉科学研究発表大会（2020年11月26日、千葉県鴨川市城西国際大学観光学部）において発表したものである。貴重な機会を下さった大会運営委員会に御礼を申し上げます。

引用文献

- 于航（2006）：中国の温泉文化について。温泉地域研究，第6号，49-54。
- 于航（2008）：中国東北地方における農村温泉地の地域展開。千葉大学大学院園芸学研究科教育学部地理学研究報告，第19号，31-40。
- 于航，山村順次（2008）：中国大連市安波温泉の開発に対する地域住民の評価。温泉地域研究，第10号，63-72。
- 于航（2013）：中国・湯崗子温泉の発達過程と保養・療養的利用。温泉地域研究，第20号，129-136。
- 王艷平・山村順次（2001）：中国温泉資源旅遊利用形式的変遷及び開発現状。地理科学，21（5），421～428。
- 王艷平（2004）：「中国温泉旅遊——地理学からの発見及び人文主義の挑戦」。157-160，大連出版社，大連。
- 山村順次（1998）：『日本の温泉地 その発達・現状とあり方』。78，日本温泉協会，東京。
- 山村順次（2004）：『世界の温泉地——温泉リゾートの発達と現状』。66，日本温泉協会，東京。
- 山村順次（2003）：湯治場の現代意義と課題（Present Significance of Health Spas and its Problems in Japan）。総合観光研究，45-47。
- 鞍山市史誌辦公室（2001）：「鞍山年鑑」。98-160，遼寧民族出版社，中国鞍山。
- 鞍山市史誌辦公室（2002）：「鞍山年鑑」。88-170，遼寧民族出版社，中国鞍山。
- 湯崗子温泉療養院（2004）：内部資料。1，湯崗子温泉療養院，中国鞍山。